《鏡No. I 波斯更紗》 昭和45年（1970） 千葉市美術館寄託

《東京震災跡風景 浅草》 大正12年（1923） 千葉市美術館蔵

《机上小禽》 昭和3年（1928） 千葉市美術館寄託

＊作品は3点とも平塚運一による

C'n scene news

VOL. 86

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

［編集・発行］
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp
［発行日］2018 年 8 月 4 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

木版画の神様　平塚運一展
2018.7.14▷9.9
担当学芸員に聞きました！「木版画のレジェンド」

所蔵作品展「旅 －ちょっとそこまで、遠くまで」
2018.7.14▷9.9

館長のつれづれだより 「平塚運一先生を想う」

美術館の仕事を紹介します！ その2：学芸員②「作品調査（続）」

ボランティア日和

館長のつれづれだより　平塚運一先生を想う

平塚運一先生にお目にかかったことがあります。いまから58年前のことです。わたしは大学で、パレットクラブという絵を描くサークルに属して下手な油絵を描いていました。そのクラブでは、2 カ月に 1 度ほどの割合で会員が描いた作品を持ち寄り、それぞれの作品を批評し合う「合評会」を開き、自分たちの作品の創作、制作の向上を目指しました。その合評会には、村井正誠、益田義信、鈴木信太郎、仙波均平など当時一流の画家の先生方をお招きして、ご指導を仰いだのです。そうした先生のお一人として、平塚運一先生も神奈川県の日吉にあるパレットクラブのアトリエにお出で下さっていたのです。

先生は、丸い帽子に、いつもロシアの民族衣装の一つであるルパシカをお召しになっていたことが、わたしには強く印象に残り、いまでもはっきりとそのお姿を憶えています。先生は髭（くちひげ）をたてておられ、眼鏡をかけた小柄な老人だったと記憶しています。わたしが大学に入学したのは、昭和 35年（1960）の4月でしたから、今回千葉市美術館で開催する「木版画の神様　平塚運一展」の担当である西山純子学芸員に用意してもらった「平塚運一年表」（『木版画に捧げた102歳の生涯平塚運一展』東京ステーションギャラリー、2000年4月）によると、平塚先生は、時に 65 歳。その 2 年後の 1962年2月には、横浜港から多賀丸に乗船してロスアンゼルスに向かわれています。先生の渡米は、米国の軍人さんと結婚されていた三女の桂子さんの勧めだったといいます。

ですから先生の謦咳（けいがい）に接する機会を得たのは、先生がアメリカに渡られるまでの2年足らずの期間でしたが、その間ご多忙のなか、3～ 4 回は、われわれのアトリエにいらっしゃって、趣味の域を出ない学生たちの作品を、特に対象に拘ることなく丁寧にご覧くださり、適切な批評によるご指導を頂いたのです。年表に記載されているところをたどると、先生には、小学校の図画教員の経験もありますが、比較的若い時代から講習会を開いて技術指導を行うなど、絵画教育にも関心を持たれていたことが察せられるので、われわれのような大学生のクラブの合評会にも気軽にお出掛けくださったのだろうと改めて思うのです。

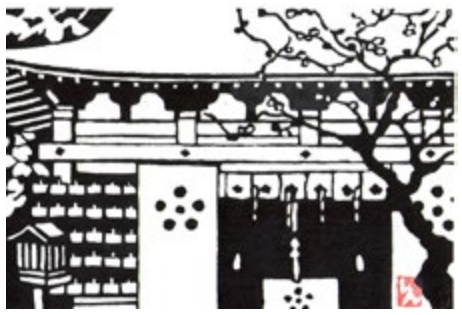
挿図に挙げるのは、1923 年のルパシカ姿の先生の写真です【図１】。わたしの抱く先生の風姿（とくにお若い時のお顔）とはやや距離がありますが、襟や袖口などにロシア風の刺繍がされた、立ち襟のブラウス風の上着であるルパシカを上手に着こなされておられ、長くこの服装を愛用されていたことが分ります。

わたしにとって先生のご指導は、有り体に言う「猫に小判」の喩えの通りになってしまいましたが、友人に学生時代以来毎年墨一色刷りの年賀状を送ってくれる森進吾君がおり、昨年、その全56点の作品を展示する個展を開いています【図２】。生涯の自娯としたアマチュア作家である彼などは、平塚先生から学ぶところが多かったものと考えられ、今更ながらに先生の影響力の大きさを感じざるを得ません。

縁あって平塚運一先生の貴重な作品の寄託を受けている千葉市美術館で、この度展覧会を開催する運びになりましたことには、上述のことを思い出す時、まことに幸いなことであり、不思議を得たものと、わたし個人としては深い感慨を抱くのです。東京ステーションギャラリー以来の本格的な規模の大きさをもつ展覧会です。どうか皆さまにはこの機会に「木版画の神様」である平塚運一の芸術の真髄をお楽しみください。

［館長　河合正朝］

【図1】ルパシカを着た平塚運一、1923年



【図2】森進吾57作目の近作「荏柄天神社」、2017年

木版画の神様
平塚運一展

God of the Woodblock Print: Hiratsuka Un'ichi

担当学芸員に聞きました

「木版画のレジェンド」

2018年
7月14日［土］
↓
9月9日［日］

展示作業の最終日、ライティング作業の合間に会場でお話を聞きました。まずは7階展示室入口に展示された、あの有名な作品から……。

大画面への取り組み

第二会場の入り口に展示された《雲崗瑞雲（うんこうずいうん） 蒙疆（もうきょう）》【図1】ですが、大きさにびっくりしました。

そうですね。一番大きいと思います。運一は、戦中、北京で木版画の先生をしています。昭和18年の春から10ヶ月くらい中国にいて、終戦の前の年に日本に帰ってきます。講師をするかたわら、趣味の瓦集めをしたり、仏教遺跡の調査に行ったりしていたようです。

中国へは誰かに招かれて？

日本人の計らいだったようですけど、北京の芸術専科学校の木版画の講師として招かれました。

しかし大きい……。これ、版木はどうなっているんですか？

一枚版木のように見えますが、記録は無いですね。雲崗に行った時から10年以上経ってつくられた作品なのですが、戦後、版画が国際展で注目されるようになって、版画が前衛、芸術全体の前衛に躍り出るようなことがあった時期の作品ですね。それで、海外展でも日本人の版画家が受賞するようなことが出てきました。これは「第1回東京国際版画ビエンナーレ」の出品作で、展覧会向けの大型作品ということではあります。だけど、印象に残った雲崗の景色でもありますね。

なぜ版画が前衛に？

直接の理由は、戦後、進駐軍関係者が日本の同時代の版画に注目したことでしょう。それをきっかけに、もともと日本というのは、浮世絵版画の国というイメージで外国人は見ていたわけだけれども、同時代の版画、平塚運一がそうであったところの「創作版画」に注目が集まって、主にアメリカ人の現代版画評価の高まりとともに、油絵とか彫刻とか日本画ではなく、版画が世界で日本の芸術として第一に評価されるような時代がやってくるんですね。戦後1950年代に入った頃のことです。

《雲崗瑞雲 蒙疆》は1957年の作品ですね。

そうです。50年代に入って、サンパウロ・ビエンナーレやヴェネツィア・ビエンナーレで、棟方志功とか、斎藤清とか、駒井哲郎とか、そういう版画家たちが他の油彩画家や日本画家、彫刻家をさしおいて、版画の展覧会というわけではなく、ひろく芸術の展覧会で注目されて受賞するというような状況になるんです。

アメリカへ

運一は、この後アメリカに行きます。

アメリカに行くのは1962年なので、この作品からあと5年後ということになります。ただ、渡米の原因というのはまさに家庭の事情でした。娘さんがアメリカ人と結婚して、その子どもたちの世話をしに渡米した奥さんを追って運一もアメリカへ行くわけです。まあ1年くらいの旅のつもりでしたが、行ってみたら日本でと同じようにアメリカでも自分の作品が非常に高く評価されている。そこで、日本でもやっていたことだけれども、デモンストレーションをしたり、木版画の講師として人に教えていたりして、作品だけでなく先生としての仕事も非常に賞賛を浴びる中で、こんなに自分の作品が評価されて、欲しがる人がたくさんいる国で、ちょっと腰を落ち着けてやってみようと思ったのでしょう。なんと33年もアメリカで制作するということになるんです。

67歳から33年ですか？

そう、67から、ほぼ100になる頃まで。

67歳といったら、一般的には仕事を引退してさらに時間が経っている頃ですよね。

日本でもすでに評価はされていたので、別にアメリカへ行って一旗あげるというわけもなく。勇気ある決断ですよね。60代後半という、人生をしまおうかという時期に言葉もできないのに行ってしまうのですから。

日本の版画が芸術祭で評価をされる、すごく良い時代に渡米しました。

特に木版画というのが、海外、アメリカの人にとっては非常に魅力的だったんだと思います。日本人にとっては特に日本的とも思わないけれども、アメリカの地で、この墨一色の作品というのは、とても日本的に写ったのでしょう。

モノクロですか、ここから後の時代は？

戦後は多色摺りは数少ないですね。もう墨摺に、黒白に専念するといっていいでしょう。アメリカに行ってからは、色摺り、多色摺りはほとんど作っていないんじゃないでしょうか。

最初は作品の大きさにびっくりしましたが、実はいろいろ細かいものも描いてあるんですね。

ちょっとうるさいくらい細かく描いています。写生から離れなかった人なので、見たものを感動したままに、かなり細かく描いていますね。

スケッチや下絵は残っているんですか？

すごくデッサンをする人だったようです。スケッチも重ねる人だったようなのですが、どういうものだったか私はあまり見たことがありません。ただ、ものを見てその場で描くということを大事にした人だったようですから、この作品にもかなりの習作、デッサンがあったと思います。

1950年代の仕事に注目！

いろいろと見方はあると思いますが、1950年代というのはいちばん墨摺が良かった時代ではないかと思います。

黒の出し方に秘密があると聞きました。何度も重ねて摺っていますね。

紙に墨が食らいついて離れなくなるまでという感じで。本当に漆黒というか、多少のムラも無い。

もう顔が写りそうなくらいの真っ黒。紙がクリーム色というのも。

よく使ったのは程村紙（ほどむらし）という紙ですけれども、こういうちょっと玉子色の紙とこの墨色というのが、1930年代から晩年までの、運一のスタイルになっています。

図録で見るよりも温かみがあるというか、こう、しっとりした感じが伝わってきます。墨は紙の裏側までかなり染みていますか？

はい。でも紙はかなり厚いです。あげ摺に耐えられる程度の厚みがある。本当に何度もぐいっぐいっと摺っていたはずなので。

形の実験

《勝鬘院（しょうまんいん）の塔 大阪》【図2】という作品、なんだか不思議な構図ですね。

1950年代は、日本の画壇が一気に抽象造形へと雪崩を打った時代なので、運一もつかの間そういう実験的な、あんまり安定していない構図に取り組みます。たとえば、全体ではなく一部をクローズアップしたり。画面をどう構成するかといったことに熱中した時期があって、なかなか面白いなあと思っています。

運一は木版画家だけれども、同時代の他の分野、絵画や彫刻などへの興味や交流はあったのでしょうか？

若い頃は美術雑誌の記者もしていましたし、当時の若者の例に漏れず、ヨーロッパの最新潮流なども知っていたし、刺激も受けたようですね。ただ、大正の末に初期浮世絵に開眼する、さらに遡って仏教版画に自分の突き詰めたい美の源泉みたいなものを見つけて、以来そこからそう離れなかった人です。だから、同時代の美術の先端に敏感に反応するという感じではなかったように思います。

この時期の作品には、縫いあとみたいな表現や点描のようなものも見られ、面白いですね。

版画で印象派風を狙ったという言葉を残していたりしますし、海外の影響がなかったとは思いませんが、ただ体質的に日本、東洋、それから過去の美術、たとえば雪舟の墨絵とか、初期浮世絵、仏教版画、書、拓本、そういうわりと古いものを自分の栄養にする人だったと全体としては思います。

モノクロームを極める

運一はとにかく、木版の魅力とか木版の喜びを謳歌した人という感じがします。弟子もたくさんいましたが、やはり皆木版画で。墨摺のスタイルみたいなものに非常に引きずられている気がします。

モノクロデザインを極めている、といった印象があります。もちろん木版画作品なのですが、すごくデザイン的なところがありますね。

特にこのあたりは新しい感じを出している時で、黒と白でいかに画面を構成するかということを、いちばん考えていた時期だと思います。

《十五夜》【図3】という作品、すてきです。

満月と戯れる雲みたいなのが面白かったらしいんですけど。非常に装飾的な感じで、見たものをそのまま表そうとはしているんだけれども、それだけではなく、黒と白をどういったバランスで画面に置くか、どういう形を配するか、満月をどこに置くか。構成的というか、少し抽象に傾くような時期なんですね。どちらが地でどちらが図なのか。普通は紙が地で墨が図なのですが、どちらがネガでどちらがポジなのか、ちょっとわからなくなるような感じがあって、それがすごく面白いんです。

輪郭線が無いんですよね。《朝の大佛殿》【図4】という作品がありますが、これも建物の塊があって、輪郭は抜いています。

非常に重い、重々しい。重さを大事にしたのかもしれません。この突き彫りという手法は、直接刀で彫っているのではなくて、幅のわりと狭い平刀（平たい刀）を当ててノミで突いて、彫刻みたいに彫っていくんですね。なぜそうしたかという話の中で、自身「重量感」といったことを言っています。墨の深い黒とゴツゴツした形で重さを出したかったようです。
「塊」って言ったけれど、版画は平面の構成です。けれどすごく重い、というか厚みがある感じがしますね。紙の地と墨のコントラストが非常に鮮やかで強烈だなと思います。

大好きな木版画をつくる、幸福感。

最初多色摺があって、昭和のはじめから墨摺になるんですけど、戦後こういうやや抽象的な展開があったり、アメリカに行って現地の風物を刻んで、また70代半ばから裸婦という……。102歳という生涯も珍しいし、ほぼ生涯現役というのもすごいです。
それから、わりと節目節目で新しい展開をしているというのは、運一の良いところだと思います。90代になって「自分には晩年はない」と断言して、奥さんによれば「200歳、300歳まで生きるつもりなんですよ、この人はもう。まったく」みたいな人だったらしい。そのエネルギーの凄さは評価すべきところでしょう。

その力はどこから？

もう、とにかく木版画が好きという、制作の喜びなんですよね。絶対的な木版への信頼がある。それまで版画というのは、他のジャンルからすると一段低いものだと思われていましたし、複数できることから印刷と芸術の中間みたいにとらえられるようなこともあったと思いますが、運一は本当に木版画というものを全幅信頼する。素晴らしいものであるという、本当に揺るぎない自信で信頼し切った80年の画業という感じでしょう。普通アーティストというのは、自分の来し方を振り返って「これで良かったんだろうか」とか、ちょっともがいてみたりするものですが、そういうところはあまり無かったと思います。大好きなものに心動かされたら、大好きな木版画で作る。以上。みたいな。非常にシンプルなんですよね。それはなかなか他には無いことかもしれません。
松江の宮大工の家に生まれ育って、だから木とか紙とか刃物というのが、常に身近にあって、体に染みこんでいたわけです。自分のルーツを遡って、良いものを見つけて、それを自分にいかして新作を作っていくという、壮大な生ける木版画史、みたいな感じがします。

［話し手：上席学芸員　西山純子］

【図1】《雲崗瑞雲 蒙疆》 昭和32年（1957）／運一 62歳　木版墨摺　千葉市美術館寄託　84.8×129.0cm=紙のサイズ

【図2】《勝鬘院の塔 大阪》 昭和30年（1955）／運一 60歳　木版墨摺　千葉市美術館寄託

【図3】《十五夜》 昭和32年（1957）／運一 62歳　木版墨摺　千葉市美術館寄託

【図4】《朝の大佛殿》 昭和36年（1961）／運一 66歳　木版墨摺　千葉市美術館寄託

8月開催の関連イベント

中学生のためのギャラリークルーズ'18
8月23日（木）、24日（金）／10:00～15:00随時受付
（所要時間30分程度）／参加無料
子どもだけでの来館と鑑賞を美術館ボランティアスタッフがサポートします。一人でもグループでも参加可。
夏休みの宿題（展覧会鑑賞）にも対応できます。
参加希望の方は8階展示室へお越しください。

【スペシャル講座】
「小さな木版画－木口木版画の魅力」
【講師】長島充（画家・版画家／日本版画協会会員）
8月26日（日）14:00より2時間程度／11階講堂にて
／参加無料／定員40名／対象：小学校高学年以上
（事前申込制※申込締切　8月15日（水）必着）

【市民美術講座】
「木版画の神様：平塚運一の人と作品」
8月4日（土）14:00より（13:30開場予定）
「平塚先生こんにちは：平塚運一とその弟子たち」
9月8日（土）14:00より（13:30開場予定）
いずれも【講師】西山純子（当館上席学芸員）
11階講堂にて／聴講無料／先着150名

美術館で緑日気分!!
8月19日（日）／13:00～17:00／1階さや堂ホールにて
毎年恒例！「千葉の親子三代夏祭り」にあわせて花輪茶之介さんによる飴細工の実演ほか、様々なお楽しみブースをご用意します。大人も子どもも緑日気分をお楽しみください。
入退場は自由です。

昨年開催時の様子

詳しくは「木版画の神様 平塚運一展」チラシ、または千葉市美術館ホームページをご覧ください。

同時開催

所蔵作品展 旅 ―ちょっとそこまで、遠くまで

歌川国芳 《東都名所 かすみが関》 天保(1830-44)前期　横大判錦絵

見たことのない風景や、すてきな出会いが旅の楽しみならば、遠くへ行かなくたって体験できるかもしれません。美術館の展示室にならんだ作品は、私たちを見たことのない世界へと連れて行ってくれるでしょう。旅する人々のイメージに誘われて、展示室の中へ。夏休みの旅が始まります。
「海の日」「山の日」にちなんだ作品もあります。

観覧料　一般　200円（160円）
　　大学生　150円（120円）
※（　）内は団体30名様以上
※ 千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※ 同時開催「木版画の神様 平塚運一展」入場者は無料

開館時間　10:00～18:00（金、土曜日は20:00まで）
　　※入場受付は閉館の30分前まで
休館日　8月6日(月)、9月3日(月)

美術館の仕事を紹介します！

その2 学芸員②「作品調査（続）」

城山（じょうやま）　その名も「長嶋茂雄ランニングロード」（!!）からの眺め

修善寺の旭滝
「柱状節理」の六角柱の岩石断面がきらめく

「旭滝」
石井林響スケッチブックより（千葉市美術館蔵）

「淡島全景」

合作《修善寺風物扇面散》（伊豆市蔵）　調査作品のひとつ。24歳頃の林響が「城山」や「旭滝」を描いている。

まだまだ調査中 !?

本コラム第二回目は、「作品調査（続）」として、11月から開催する「生誕135年　石井林響展」の告知を兼ね、個展（回顧展）へむけての調査についてご紹介します。

石井林響（1884～1930）は、房総ゆかりの近代日本画家です。千葉に生まれ、東京で若くして頭角を現し画壇の中央で活躍しながら、次第に「野に帰る」心持ちとなり、郷里近くに画房を築いて移住、新たな展開を期すもほどなく45歳で急逝しました。新境地に歩み出した林響がその才筆を以て次にはどのような作品へ進んだだろうかと、「せめてあと5年は生かしておきたかった」と惜しまれたという、同じ思いがします。

個展（回顧展）を開催するということは、画家の生涯をかけた仕事の全貌をいかに把握できるのかということに始まります。もし生前に展覧会や没後の遺作展があって、その作品や資料が少しでもまとまってご遺族や門下、支援者筋などに継承されていれば幸運なケースで、そこからスタートできます。そして一人一人つてを辿って作品の在処を確認し、その地へ赴き、作品の質や状態、作品のある場所周辺の情報を集めながら、画家の生涯というパズルの１ピースを埋めていきます。そこから何を切り取って選び、どのように展示に構成していくかという次の段階も同時に見据えてその場で判断し、出品などの具体的なお願いもしながら、ぎりぎり時間切れの時までこの調査を続けるのです。

林響については、まず公的機関の作品所蔵は千葉県以外ではかなり限られます。それでも広範囲にところどころに存在し、それは何に由来するのか、その場所での存在理由を考える事になります。また作品の所蔵先だけでなく、林響が住んでいた南品川の辺りを歩いてみたり、縁者がいた旧家住宅付近を訪ねたり、橋本雅邦の門下生として中心になって建立したという師の筆塚を見に行ったりと、足跡もたどります。現地に赴くと、画家が確かに身を置いた痕跡を自分なりに発見して、画家の視点を通じて過去と現在がつながり霧がはれたように腑に落ちる瞬間があります。先日は、若き林響が長逗留したことが知られている伊豆の修善寺を訪ねました。先々でお世話になり、未紹介であった画家の書簡や下絵など、各種の資料を知り得たことは有り難い収穫でしたが、さらに作品は知っていたのにあまり気に留めていなかった描写の由来やスケッチの中の小景を現地に見出し、これが描きたかったのかと興奮を覚えることもありました。本人の心中に近づけた気がして展示への意欲や構想が沸いてきます。こういった出会いや小さな発見を積み重ねてこそ、生き生きとした展示（!）が作られ、それは伝わるのだと信じています。

過去の展覧会等の実績をたどり現況を確認してゆくと、作品は実に動くものであり、資料の継承は難しいものだと実感します。なにより人が動いていますから。

画家の故郷たるべき地域の美術館の仕事とは、その画家の一生と、画家や作品を取り巻く人々の生涯とも永くつきあっていくということなのだなあとつくづく思う昨今です。展覧会はひとときの祭りのようなものながら、その実現のために精魂傾けて調査に回ること、その成果を地域の財産として残して伝えていくのが美術館の大切な仕事なのでありましょう。……と意を新たにして、会期までの残りの日数をにらむ日々、といったところです。

［上席学芸員　松尾知子］

ボランティア日和

この春から千葉市美術館で活動を始めたばかりの、新米ボランティアの私。

頼りになる先輩方や、向上心あふれる同期たち、そして面倒見の良い学芸員さんたちに囲まれて、とても楽しく活動させていただいております。

ボランティア活動を始めて、特に子供達の鑑賞教育に携わるようになって、美術を「鑑賞する」ということについて改めて考える機会が多くなりました。

ある美術作品と一対一で向き合った時、自分はどのような反応をするのか。

その作品のどこが気に入ったのか、どうして気に入ったのか。

あるいは興味を惹かれないのはどういう作品なのか。なぜ関心を持てないのか。

自分の心の動きを観察していると、今まで気づかなかった「自分自身」を発見することがあります。作品との対話は自分自身との対話でもあるのです。

また、自分と違う価値観や文化的背景を持つ他者が作った作品を見て、それを理解しようとする試みは、自分自身の心の幅を広げてくれます。

真面目に考えれば考えるほど、美術を「鑑賞する」ことはとても素晴らしいことなんじゃないかと思うようになってきました。

千葉市美術館を訪れる方々が、それぞれに「鑑賞する」ことを味わい楽しむための一助となることが、ボランティアとしての私の使命であります。この使命を忘れないように活動していきたいです。

私のボランティア道は始まったばかり。自分の美術鑑賞哲学を深めつつ、仲間たちと一緒に成長していけたらいいなと思います。

［美術館ボランティア　橘高 絢］

千葉市美術館 友の会は こんなにお得!

CCMA

◆年会費 2,500 円で何度でも展覧会が見られる！

◆会員の同伴者が割引または無料に。さらに展覧会招待券もプレゼント！お友だちとご一緒に鑑賞してみては？

◆ミュージアムショップやレストランでも割引!

◆バスツアーなど会員限定のイベントも。

その他特典が盛りだくさん!

詳しくはパンフレットをご覧ください。受付などで配布しております。
ご入会を待ちしております。